

# インテリ？

大橋 秀雄 (第5部会員)

世の中ではよく「あの人はインテリ」だという。知的な人という意味で使われるようだが、字引で見ると限りインテリジェンスにもインテリジェントにもその用例はない。しかしインテレクチュアルの項目を見ると、そこには形容詞のほかにも名詞の用例があり、これが丁度インテリに対応している。

インテリはいつ頃から使い始められたのか？どうしてインテレクチュアルからインテリという和製英語に変わったのか？調べれば面白いと思われるが、原稿の締切が迫った身にはそのゆとりがない。そこで、インテリとは何かと前から考え続けてきた話題に入りたいと思う。

インテリの資格は何か？昔は大学を出たというだけでインテリと言われた。大学出が同世代の数パーセントの時代では、そう言われても違和感がなかったのかも知れない。しかし今や同世代の半数近くが

大学や短大を出る時代である。それが全部インテリだとすると、本当のインテリが泣いてしまう。では、少し格上げして大学院出ならインテリか？ノー。それなら、博士ならどうか？やはりノー。昨今のオウム事件に博士の卵が多く関わったおかげで、博士のインテリジェンスがそれこそ白紙に戻されてしまった。

議論というのは、往々にして定義の食い違いから起こる。家庭内でもよく意見の食い違いが起こり、かましい論争に発展することがあるが、大体においてその原因は定義の食い違いにある。たとえば「あの人はインテリね」という簡単な会話でも、肯定と否定を繰り返す舌戦に発展する恐れがある。私のインテリの定義は厳しい。一見知的に映るだけでインテリと言われたのでは、つい反発する。さりとて、家庭内の会話まで科学論文のようにまず言葉の定義

から入るのでは味気ない。延々と言葉の定義をすり合わせる厳密さよりは、食い違った定義のまま口角泡をとばす方が会話が弾んでくる。

さて、そろそろ私なりの定義を述べることにしよう。インテリとは「行動がコンシステントな思考に裏付けられている人」というのがそれである。これだけでは分かりにくいので、具体的な例を挙げてみる。電鉄会社のデモ隊が掲げるプラカードに、「大幅賃上げ獲得。運賃値上げ反対」とあったとする。この二つの要求は、普通に考えれば相容れない。すなわちコンシステントでない。そのことに気付かずに、ただ行列に参加して氣勢を上げるだけでは、とてもインテリとは言えない。しかし、その二つを両立させるような迷案、いや名案を考えだし、それが十分な説得力を持つならば、同じ行動をしていてもその人は立派なインテリである。

どんな些細な行動でも、インテリたらしめるとこれが意外と難しい。自動販売機で缶ビールを買うとき、スチール缶とアルミ缶の両方が並んでいたりする。どちらかを選ばなければならない。ぼんやり適当に買うようではインテリとは言えない。味の点は一応別として、アルミ缶とスチール缶では、どちらがリサイクルに適しているのか。回収から再生までをトータルに見ると、エネルギー消費、廃棄物の発生、環境汚染などに関してどちらに分があるのか。これはなかなか難題である。しかし遠い先の地球環境を思うと、小さいことだと言っておろすかには出来ない。さりとしてあまり長いこと自販機の前で思い悩むと、後ろの人がイライラする。そこで、持ち合わせの知識を総動員して、とりあえず一つの結論を出さなければならない。個人の知識は有限で、往々にして誤謬がある。そのような知識を基にした結論は、間違っているかも知れない。しかし自分なりにコンシステントな思考経路をたどって行動に移すことができれば、それは立派なインテリに値する。

実をいうと、私もインテリを目指している。しかし、話が自然科学的な道理の枠内にあるときは、自分の知識で何とかコンシステントな条理を積み重ねることが出来るが、これが政治・経済・税制・法律などと絡んでくると、俄然雲行きが怪しくなる。知識が不足で、因果の糸が途切れてしまうのである。

科学技術に携わるものは、それが人間の尊厳を確立するのに役立つと信じて進歩に荷担している。科学も技術もその歴史は古いが、産業革命以来の科学と技術の絡み合いは、個人の生活から政治形態に至

るまで、これを大きく変える原動力となってきた。機械化によって、厳しい肉体労働からまず人間を解放する。富と力を蓄えた人々が、人権に目覚めて主権を自らの手に取り戻す。かつての切捨て御免の世界のように、非条理の権力に泣く時代は終わった。近代化の歴史の中で、人間の尊厳が一つ一つ具現されてきたが、そのプロセスで科学と技術が重要な推進力となってきたことは自明である。

いま世界は大競争時代を迎えている。先進諸国はこぞって戦略的研究を強化し、研究開発競争で少しでも優位な地歩を固めようと必死である。伊藤会長を初めとする我が学術会議も、戦略研究の体制強化を強く訴えている。しかし私自身にとっては、その先に待つものの姿がまだ十分読み切れていない。

戦略研究の強化は、科学技術の偏在を一層進め、強い国はますます前に進み、弱い国はますます遅れるようになる。科学技術力の差は、今や経済力の差に直結する。地球規模でこれまで以上に貧富の差が拡大すれば、科学技術の進歩が人間の尊厳を確立するなども言えなくなる。

しかし、もう一つの見方もある。現在東アジアの国々に急速な経済発展をもたらしている原動力が、彼らの自前の科学技術力にあるとはとても思えない。むしろ、グローバルに激しい競争を繰り広げる巨大企業が、安価な労働力を求めて現地の雇用を拡大したことがきっかけとなっている。戦略研究の成果がまず巨大企業に取り込まれるとしても、その激しい競争の陰で遅れた国々が次々にテークオフできれば、貧富の拡大を防ぐのに結果的に有効である。どちらの見方が正しいのか？私の乏しい知識では、正しい因果の糸をたぐることはとてもできない。

このような場合に、いつも思うことは日本学術会議という全知の集合である。もし1部から7部までの会員の知識を合わせ持ったスーパーマンが存在したら、どんな場合でもコンシステントな思考を進めることができるのではないかと。そんな全知人は、個人としてはもちろん空想であろう。しかし、組織として全知人たることは可能であり、またそれこそが学術会議の真の価値であるように思える。

インテリというのと、とかく思い悩むだけで行動に移せない弱々しい姿が浮かんでくる。しかし日本学術会議は、全知に基づいて行動する強いインテリであって欲しい。私はその一かけらとしてお役に立つことを、心から願っている。